

音の散歩路

～音楽の“なにか”を探す旅

～ロマを通して見る音楽性～

国立音楽大学音楽文化教育学科
教授

横井 雅子

ある地域やそこに住む人々、あるいは時代に特有の音楽とはどんなものなのだろう、なにか“その音楽”を特徴づける要因となるのか。

「グローバル化」という言葉を持ち出すまでもなく、現代のテクノロジーはさしたる金銭的負担もかけずに、さほど技術的な困難さを伴わずに世界中に音楽や芸能を瞬時に発信できるので、縁もゆかりも無い地の音楽がふと耳に入ってくることもあるし、それが当事者も予想しなかった大反響を呼ぶことだってある。2015年に公開された映画「ソング・オブ・ラホール」はそのことを象徴的に示していた。イスラーム原理主義の影響で活動の場を失いかけていたパキスタンの伝統音楽の演奏家たちが、自らの楽器でジャズを演奏して動画サイトで発信したところ、それがウィントン・マルサリスの目に留まり、ニューヨークのジャズ・アット・リンカーン・センターに出演してしまう、という奇跡のような出来事が待っていたのである。彼らの苦し紛れのような試みがアメリカの聴衆たちを喜ばせ、その顛末が日本でも披露され、流れに乗るかのようには日本にも招待される、というオマケまでついた。

この出来事が示しているのは、ラホールというパキスタンの一都市の演奏家たちがジャズのスタンダードナンバーを演奏しても極めて独創的かつ高い演奏力を発揮したからこそ、まさに地球規模でインパクトを与えたのであって、グ

ローバル化という言葉が含む「文化の同化、融合、差異の減少」とは異なる展開に人々が魅せられたということではないか。こういう時代だからこそ、夥しい量の情報から人々が“なにか違うもの”に自然と心惹かれるように思えてならない。

ラホールの楽師たちの例は、私が比較的長く調べている「ロマ」と呼ばれる人たちと際立った対照を示している。ラホールの楽師たちは自らの地域で培われてきた音楽の伝統に拘泥することで成功したわけで、ラホールという土地、そこに住む人々、そこでの長年にわたる伝統がイコールの関係で結ばれている。一方、一般に「ジブシー」の名称で知られてきたロマたちはこの三つがイコールで結べないところに大きな特徴がある。

音楽を生業とするロマの多くは現在、ヨーロッパの複数の国や地域に分散して住んでいる。彼らのルーツは（偶然にも）ラホールのあるパキスタンとインドの国境地帯あたりと考えられており、なんらかの理由でそこから西進して西アジア、ヨーロッパ、北アフリカなどにたどり着いたようだ。流れ着いた先の土地でよ者だった彼らが生活を成り立たせるために手がけた生業の一つが音楽・芸能で、中世のヨーロッパでは社会の正式な成員が娯楽のための音楽・芸能を職業とすることを忌避する傾向にあったことがその背景にある。

ここで注目したいのは、ロマが生活の手段として音楽や芸能に携わってきたという点である。むろん、自らのコミュニティ内で歌い、踊ることもあろうが、それらは金銭を得るための音楽や芸能と同じとは限らない。かつては放浪生活を営んでいたロマたちは、行く先々で演奏したり踊ったりするに際して、その土地に住む人々がその時にどんな音楽や踊りを好んでいるのか、ということをもまず知ることが最大の関心事だっただろう。それを知ること無しに演奏しても、人々の耳目を惹きつけて収入に結びつけることはできないからだ。どんな楽器が流行っているのか、どう演奏し、どう踊れば面白がってもらえるのか…。ロマたちは弾き、踊りなが



イジョー・ミクローシュによるジプシー楽団の彫刻（1869年。ハンガリー・ナショナル・ギャラリー蔵）

ら、実は周囲の様子を冷静に見極めてきたのに違いない。

彼らがヨーロッパで活動し始めた頃の様子に私が思い至ったのは、何人かのロマの楽師と交流をもつようになってからのことである。私がロマの音楽に触れるきっかけはハンガリーの伝統音楽の研究からで、自称マジダルと呼ばれるハンガリー人の固有の音楽が、実は19世紀頃



もはや楽団を組めず、日銭を稼ぐ楽師の姿も（ハンガリー、ブタペスト）

に信じられていたロマの演奏してきた音楽とは別物である、としきりに言われることにちょっとした疑問を持ったことから始まっている。このテーマ自体も興味深いものだが、ここでそれを詳述する紙数は無い。ただ、リストやブラームスの「ハンガリー風音楽」の中に活写されていたジプシー楽団（と呼ばれるアンサンブル）の音楽は、観光客には依然として人気があるものの、現在のハンガリーの音楽シーンではほとんど顧みられない存在となっている。だとすれば、19世紀から20世紀初頭にかけてのあの熱狂はなんだったのか、その熱狂が去った後の楽師たちはどうしているのか、そのことを知りたくて30年近く、彼らとその音楽をたどってきた。

その30年近く前でも既にジプシー楽団はかな

り衰退しており、質のよい演奏に滅多に出会えなかったが、その後はこのジャンルに従事する楽師が私の予想を上回るペースで減少し続けている。ジプシー楽団は18世紀後半から世襲で受け継がれてきた。ごく短期間で急速に知名度を上げ、ベートーヴェンも生で聴いたことがある、とか、王侯貴族の間で流行し、国王の戴冠の祝賀会で彼らが演奏したとの記録もある。世襲家の中にはこうした華々しい活躍をした楽師を先祖に持つ者もあり、伝統保存の意識が高い日本人の理解からすると、こうした領域は守り継ぐべきものということになるのだが、調査していくうちに当事者の意識は全く異なることが見えてきた。最も知名度の高い世襲家では今も何人も楽師が活動しているが、その子供の代とな



「楽器が無かったらヴァイオリンを口真似したものさ」（スロヴァキア、コシツェ）



レストランにつきものの楽師たち。金属のクラリネットが特徴的（トルコ、イスタンブール）



シンセサイザーとドラム・シンセ中心の婚礼用バンド。音楽そのものは極めて伝統的（マケドニア、シュト・オリザリ）

ると話は別だ。音楽を専門にはさせない、あるいはさせてもジブシー楽団ではなく、クラシックとかジャズというケースばかりなのである。「200年以上も続いてきた有名な家柄なのに、もったいないと思わない？」と尋ねると、「全然そう思わないね」とそっけない答えが返ってくる。さらに問いを続けると、「だって、今のハンガリーではもうこの音楽は求められていないんだよ。必要ないとされているものにしがみつく理由はないから」との説明だ。

ハンガリーの地でジブシー楽団が活動し始めたのは、ハプスブルク家がロマの同化政策をとり、彼らが定住したことが契機になっている。ロマ固有の言葉でなくハンガリー語を話し、ハンガリー人同様の生活形態をとり、ハンガリー人、とりわけ上流階級の人々が好んだ楽器とその音楽を演奏することで彼らは地位を築いてきた。そうして200年以上もの間、ハンガリー人の心の琴線に触れる音楽を奏でてきたはずだった。しかし、時代が変わり、音楽に対する評価

も変わり、ハンガリー人のライフスタイルも変わった時、長い安定を経てきたロマの楽師たちは、ヨーロッパにやってきた時のようにその地域、その人々、その時代の好みを読み取ろうとやっきになっている。そうすることがまるで彼らのDNAに組み込まれているかのように。

そうしてみた時に、ではロマたちを特徴づける音楽とはなんなのか、という疑問が浮かぶ。一世を風靡したジブシー楽団の音楽はハンガリー人を熱狂させたが、ハンガリー人の音楽そのものとは考えられていないし、共通する部分は大きいにあるにしても、そこに異なる“なにか”が確実にある。そのことを知るために、歴史的にハンガリーと関わる地域のみならず、バルカン半島、西アジアのロマにまで考察の範囲を広げてみる。いずれの地においても時代と折り合いをつけながらも彼らならではの表現を見つけることができる。その“なにか”を私がしっかりと見極める日がくるのか。ロマの音楽にいざなわれての私の旅はしばらく続く。